

# 国際理解教育における学習機能に関する試行的研究

—『留学生が先生』授業における5年間にわたるアンケート調査をもとに—

上越教育大学 三村 隆 男

## 1. 現状と課題

進学や正規の就職をせずフリーターと呼ばれる若者の増加が労働省から報告され、その要因の一つとして、高等学校が将来を考える教育である進路指導を十分行っていない<sup>ii</sup>との指摘がある。一方、第15期中央教育審議会第1次答申では「自分で課題を見付け、自ら学び自ら考える力、正義感や倫理観などの豊かな人間性、健康な体力」である「生きる力」の育成が求められ、さらに同答申の「第2章 国際化と教育」では、「国際理解教育の推進は、一人一人の子供たちの個の確立ということと同心円をなしていると言いうことができる」とし、国際理解教育に「生きる力」の育成を委ねている。さらに、1999年告示の高等学校学習指導要領の特別活動におけるホームルーム活動の内容のひとつに「(3) 学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択決定に関すること」<sup>iii</sup>とし進路指導の内容を示している。そこで本研究では、「生きる力」と将来を考える教育である進路指導との共通性に注目し、国際理解教育における学習機能と進路指導との関連を試行的に検討を行い、現在の若者が抱える就労に関わる課題解決の可能性を探る。

筆者は2000年3月まで県立W高等学校にて国際理解教育を推進し、限定的ではあるが継続したデータを収集してきた。ここに国際理解教育の学習機能を分析し、2003年施行の学習指導要領に示されたホームルーム活動における進路指導との関連の可能性を検討するためその整理と分析を行い課題に迫りたい。

## 『留学生が先生!』について

県立W高等学校(普通科8クラス、外国語科1クラス)では、特別活動におけるロング・ホームルームの時間(以下LHR)を使用し『留学生が先生!』授業を取り入れている。本授業は、日本の大学や大学院で学ぶアジアを中心とする留学生を招きホームルーム単位で国際理解教育を展開するものである。目標を「アジアを中心とした外国からの留学生(大学院生)を招き、学校の中に海外を取り入れ、できるだけ多くの生徒に知識と心の両面から異文化に対する理解を深めさせる。また、講師の生き方にふれることにより生徒に自分自身の在り方生き方を考えさせる」と設定し、異文化理解と自己の在り方生き方を考えさせることを目指した。本研究では、第1学年を対象に実施を始めた1995年以降の調査結果を元に考察を行う。資料1は1997年の授業展開例であるが、例年ほぼ同様の内容で実施している。事前準備に3時間、展開に2時間を使用し、展開例には示されていないが、実施後にアンケート調査及び感想記入に1時間をかけ、通常、LHRを合計6時間使用している。

## 2. 研究の目的

「留学生が先生!」授業における事後アンケート調査の因子分析を通し国際理解教育の学習機能を分析し、進路指導との関連について考察する。

## 3. 研究の方法及び結果

国際理解教育のもつ一般的学習機能として、「学習意欲」「異文化理解」「コミュニケーション」

「自国人意識」iv「行動・価値観」「将来設計」の6つを設定し、それぞれに関して5つの質問項目を作成し質問群を構成した。各質問項目に対し、5件法(1~5点:1点「ほとんどあてはまらない」、2点「あまりあてはまらない」、3点「ややあてはまる」、4点「かなりあてはまる」、5点「非常によくあてはまる」)による回答を求

めた。調査時期は1995年の11月、対象は「留学生が先生!」授業実施1週間後の第1学年生徒全員398名である。有効回答数324であった。表1は、調査結果に対し、因子分析(主因子法、バリマクス回転)を行ったもので4因子を抽出した。

それぞれの因子に対し、第1因子「生活・学習・

表1 30の質問項目に対する因子分析(主因子法、バリマクス回転)結果

No.	質問項目	I	II	III	IV	H.
第1因子 生活・学習・コミュニケーションへの意欲性						
4	自分の行動に責任を持つようになった。	.67	.15	.31	.04	.568
26	自分に自信がもてるようになった。	.64	.14	.10	.10	.453
6	抵抗なく英語を話すようになった。	.63	.15	-.13	.41	.598
9	国語学習に対する意欲が高まった。	.60	.31	.08	.05	.469
23	自分の意見をはっきり言えるようになった。	.56	.15	.34	.20	.496
22	家庭で積極的に学習するようになった。	.51	.21	.33	.08	.416
8	手紙などを書き人に気持ちを伝えることが増えた。	.48	.00	.14	.41	.425
18	授業を大切に考えるようになった。	.47	.31	.40	.06	.448
第2因子 自国人意識						
11	自分の国の伝統文化に興味を持つようになった。	.24	.77	.13	.05	.661
5	自分の国の文化をもっと知りたくなった。	.25	.76	.06	.11	.651
20	自分の国を世界に伝えたくなった。	.08	.68	.19	.27	.585
30	世界の中の自分の国の在り方について考えるようになった。	-.01	.62	.32	.32	.583
3	自分の国の人であることを意識するようになった。	.22	.58	.18	.18	.447
27	海外のニュースに関心をもつようになった。	.27	.55	.22	.13	.443
2	異文化を積極的に理解したくなった。	.14	.52	.21	.33	.449
第3因子 価値観・生き方への意識						
19	自分の生き方についてよく考えるようになった。	.22	.12	.68	.13	.540
28	人間にはいろいろな生き方があるものだと感じるようになった。	.05	.19	.65	.10	.446
13	自分の将来の職業についてよく考えるようになった。	.33	.03	.63	.15	.530
21	何か自信をもって表現できるものが必要と考えるようになった。	.23	.21	.62	.12	.496
12	世界の平和が大切だと思うようになった。	-.06	.25	.61	.11	.444
25	ものの見方や考え方が広がった。	.30	.39	.52	.13	.535
15	困っている人を助けたいと思うようになった。	.12	.02	.51	.35	.391
24	人の言うことに耳を傾けるようになった。	.40	.28	.47	.11	.468
第4因子 異文化との近接意欲						
17	海外のことをよく知るため海外の学校で学びたくなった。	.07	.17	.12	.78	.659
16	留学生を自宅にホームステイで受け入れたくなった。	.15	.14	.08	.71	.557
29	海外で仕事をしてみたいと思うようになった。	.03	.24	.17	.69	.565
14	海外の人と文通をしてみたくなった。	.22	.21	.21	.68	.597
7	国際社会で活躍できる学習に意欲的に取り組みたくなった。	.16	.26	.37	.52	.499
10	外国の人に積極的に近づくようになった。	.48	.09	.10	.50	.450
1	英語学習に対する意欲が高まった。	.43	.19	.16	.44	.438
因子寄与		3.89	3.89	3.87	3.76	15.402

コミュニケーションへの意欲性」、第2因子「自  
 国人意識」、第3因子「価値観や生き方への意識」  
 及び第4因子「異文化との近接意欲」と命名した。  
 表1の因子分析の累積寄与率は51.34となり50

%を超えた。分類は妥当であり、新たな分類の  
 視点が提示された。表2は、30の質問項目にお  
 ける当初の6質問群と4因子の対応を示したもの  
 である。

表2 30の質問項目における6質問群と4因子の対応

質問群 \ 因子	生活・学習・コ ミュニケーション への意欲性	自国人意識	価値観・生き方 意識	異文化との近接 意欲
学習意欲	9,18,22			1,7
異文化理解		2,27		10,16,17
コミュニケーション	6,8,23		24	14
自国人意識		3,5,11,20,30		
行動・価値観	4		12,15,21,25	
将来設計	26		13,19,28	29

表3は、4因子に類型された質問項目において、  
 「留学生が先生！」授業後の積極的変容を認めた  
 回答、4点の「かなりあてはまる」及び5点の「非

常によくあてはまる」を回答した生徒の百分率  
 を過去5回にわたって算出したものである。

表3 授業アンケートで5点、4点を選択した生徒の割合（％）

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
1995年	14.6	27.9	42.3	24.1
1996年	11.7	23.6	40.2	22.3
1997年	10.6	25.9	40.6	24.9
1998年	9.1	17.3	31.4	21.3
1999年	10.9	23.9	39.3	26.3

さらに、国際理解教育の教育機能と将来を考  
 える教育との関連を知るため1996年の「留学生  
 が先生！」を実施する前に、将来を考える教育  
 として進路指導の学習（以下進路学習）を5回計  
 画的、段階的に実施し、前年度の生徒と交互作  
 用を検討した。検討に際しては、進路学習と特

に関係が強いと思われる第3因子「価値観・生き  
 方への意識」との関連に注目した。表4は、1996  
 年の1年生に対して「留学生が先生！」授業まで  
 に実施した進路学習の内容である。

表4 1996年1年生の「留学生が先生！」授業までの進路学習内容

実施月	使用時間	進路学習タイトル名	使用資料
4月	LHR *	「これから高校生活を始めるに当たって」	進路作業シート1
5月	LHR	「進路と学習について考える」	進路作業シート2
6月	LHR	「コース・選択科目決定を前に」	進路作業シート3
6月中旬～末 職業インタビュー実施報告			インタビュー用紙
7月	LHR	職業インタビュー実施報告	
9月	LHR	「卒業後さらに深める学問について」 —学部・学科と職業との関連について調べる—	進路作業シート4
9月中旬～学部・学科・コース調査 —進路室の大学案内、授業計画、講義内容等を利用して—			学部・学科・コース 調査用紙

表5は、4因子における1995年と1996年の回答結果の平均と標準偏差である。第3因子の標準偏差の変化(5.9→6.5)以外に目立った変化はない。

表5 1995年と1996年の回答結果の平均と標準偏差

年度	因子	データ数	平均	標準偏差
1995	第1因子	324	19.3	5.1
	第2因子	324	20.2	5.3
	第3因子	324	25.9	5.9
	第4因子	324	17.9	5.7
1996	第1因子	336	18.2	5.3
	第2因子	336	19.3	5.5
	第3因子	336	25.5	6.5
	第4因子	336	17.6	5.8

表6は、各因子における年度間の交互作用を調べるため、年度をA要因、因子をB要因とし2×4の分散分析を行った結果である。年度間における有意傾向は認められたが、因子における年度間の交互作用は認められなかった。

表6 年度×因子の分散分析結果

要因	平方和	自由度	平均平方	F値
年度	248.4	1	248.4	2.8+
Sub	58073.7	685	88.3	620.0**
因子	25499.2	3	8499.7	1.3ns
年度×因子	54.3	3	18.1	
誤差×因子	27062.2	1974	13.7	
合計	110397.8	2639		+p. 10 *p<.05 p<.01

#### 4. 考察と今後の課題

限定的なデータのため明確な結論に導くことは難しいが、可能な範囲内で国際理解教育の学習機能に関する考察を行う。まず、表2の対応表から、2つのことが学習機能についていえる。

ひとつは、第1因子「生活・学習・コミュニケーションへの意欲性」が、当初質問群の分類である「学習意欲」「コミュニケーション」の質問項目を3つずつ含んでいること。つまり、質問群で「学習意欲」とした「9 国語学習に対する意欲が高まった」、「22 家庭で積極的に学習するようになった」及び「18 授業を大切に考えるようになった」と質問群で「コミュニケーション」とした「6 抵抗なく英語を話すようになった」、「8 手紙などを書き人に気持ちを伝えることが増えた。」及び「23 自分の意見をはっきり言えるようになった」が同一因子としてまとめられたということである。これは、コミュニケーションを図ることと国語学習や授業や家庭学習に意欲的に取り組むことにつながりが見出されたことになる。

もうひとつは、第2因子「自国人意識」が当初の質問群の「異文化理解」と「自己人意識」の2つによって構成されたことである。言い換えれば、質問群で「異文化理解」とした「2 異文化を積極的に理解したくなった」と「27 海外のニュースに関心を持つようになった」と質問群で「自己人意識」とした「3 自分の国の人であることを意識するようになった」、「5 自分の国の文化をもっと知りたくなった」、「11 自分の国の伝統文化に興味を持つようになった」、「20 自分の国を世界に伝えたくなった」、「30 世界の中の自分の国の在り方について考えるようになった」が同一因子にまとめられたことになる。一方、質問群の「異文化理解」は2つの因子、「自己人意識」と「異文化との近接意欲」に分けられ、「10 外国の人に積極的に近づくようになった」、「16 留学生を自宅にホームステイで受け入れたいになった」及び「17 海外のことをよく知るため海外の学校で学びたくなった」の3項目は第4因子

「異文化との近接意欲」に入った。異文化理解においては、「自国人意識」のある静的な意識変化と、「異文化との近接意欲」に発展する動的な意識変化に分けられると予測できる。

次に、表3の検討では、大きな意識変化を認めた生徒の割合が第3因子「価値観・生き方への意識」において最も高い数値を1995年の調査から継続していることを示している。ただし、各項目の得点が標準化されたものでないため、数値の高さがそのままこの因子に対して最も多くの意識の変容が見られたと結論付けることはできない。ここでは相対的に第3因子の数値が高いとの表現に限定し考察をすすめる。この点については、テストの標準化がされていれば、様々な可能性を分析できたはずである。テストの標準化及び、変化の原因についての追調査などが今後の課題であると考えられる。

以上のように表3は、限定的ではあるが意識の変化を相対的に強く認知した集団の率であり、表5は全体の平均を示している。テストが標準化されたものではないので、平均の大小からの比較は、できない。もし、行うならば、プリポスト間の比較が限度であるが、今回は、そのような比較は行っていない。第1因子「生活、学習、コミュニケーションへの意欲性」の因子が示している内容は、「学習意欲」と「コミュニケーション」に関わる項目が主で教科指導を通し学習される内容である。学習指導要領で示したホームルーム活動の内容(3)においては、第3因子が「将来の生き方と進路の適切な選択決定に関すること」にあたり、第1因子が「学業生活の充実」にあたるといえる。

最後に、表6の検討では、特に交互作用が無かった。進路学習と「留学生が先生！」授業の指導過程に具体的な独立変数を意図的に加えなかったからである。交互作用があるとすれば、生徒の質的变化や講師である留学生の変化及び、教師側の対応があげられるが、現実的に特に変化が無かったのも当然かもしれない。しかし、国際理解教育は、個の確立と同心円をなし「生きる

力」の育成を求められ、特別活動を中心に展開されることから、進路学習における独立変数を今後予測し、実験的に明らかにすることは重要な課題である。

## 5.まとめ

本研究では国際理解教育のひとつである「留学生が先生！」授業の学習機能を4つの因子としてまとめ、それぞれの因子の特徴を考察した。今後は、この学習機能をもとに「留学生が先生！」授業において6時間のLHR展開の中で、3時間の事前学習、2時間の実際の授業の展開、そしてまとめの1時間が学習の上でどのような役割を果たし、それぞれの因子にどのように作用したか検討する必要がある。また、留学生との交流内容は生徒にとっては直接の異文化体験である。個々の留学生が独自の授業を展開することが基本であるが、直接の体験が学習に与える影響を検討することにより、留学生によって生じる大きな差異は回避され、この学習が果たす基本的要件を満たすことができる。

第3因子は将来への教育である進路指導や「生きる力」との関係が予測される。今後はよりよい発展をする進路学習が認知されるような教育方法・内容を検討する必要がある。それには、4つの因子に進路学習が効果的に作用する方法・内容を検討し、さらには、国際理解教育においても将来への教育である進路指導における教育機能を想定した上でのプログラム化が進められるといった双方向的な取り組みが求められるのであろう。こうした検討に際しては、表2によって新たに示された「学習意欲」と「コミュニケーション」の関係、「自国人意識」と「異文化理解」との関連を十分考慮する必要がある。

『ユネスコ「21世紀教育国際委員会報告書 学習：秘められた宝」』では、「中等教育に共通する中心的要求（言語、科学、一般知識）は、諸現象の世界化の進展、あるいは持続可能な人間開発を促進するための異文化間理解の必要性や科学技術の利用などを反映しながら、強化され

新たにされなくてはならない。換言すれば、急速な変化を遂げ、しばしば科学技術に圧倒されるような世界に於ける生活のあり方や人生の準備によりおおくの注意が払われなくてはならない」viと21世紀の中等教育の課題を明示している。国際化が進展する中で国際理解教育の学習機能を検討し、将来への教育としての進路指導との効果的な展開を研究し実践していくことは、若者の勤労意識や就業観の未成熟が指摘される現在、学校教育に求められる喫緊の要請として受け止めなくてはならない。本稿では、こうした要請に応え、国際理解教育の実践を踏まえた試行的研究を行い今後の課題を提案した。

- i 日本労働研究機構『労働白書平成12年度版』2000年、152頁
- ii 堀有喜衣「日本労働研究機構研究報告書No.136『フリーターの意識と実態-97人へのヒアリング結果より-』」第1部第8章、2000年、97頁
- iii 文部省『高等学校学習指導要領』1999年、385頁
- iv 「自国人意識」は、当初、「日本人意識」としたが、外国籍の生徒を考慮し名称を変更した経緯がある。
- v 但し、1998年調査では全体的に数値が大きく落ち込んでいる。この要因としては、「留学生が先生！」前夜が獅子座流星群が最も地球に近づいた日にあたり、多くの生徒が半ば徹夜状態で授業に参加したことが考えられる。
- vi 天城勲監訳『学習：秘められた宝 ユネスコ「21世紀教育国際委員会」』ぎょうせい、1997年、99頁～100頁

資料

ホームルームで行う国際理解教育

—「留学生が先生！」プログラム

目的：アジアを中心とした外国からの留学生（大学院生）を招き、学校の中に海外を取り入れ、できるだけ多くの生徒に知識と心の両面から異文化に対する理解を深めさせる。また、講師の生き方にふれることにより生徒に自分自身の在り方生き方を考えさせる。

時期：2学期 11月19日(水)第5時限、第6時限

対象学年：第1学年9クラス

指導内容

ア.事前準備（11/13.17.18のL.H.Rおよび放課後）

学習課題	指導のポイント
1.行事の意義を理解する。	・講師の国やその国の人々についての理解を深めると同時に、講師の生き方を通して人間の在り方生き方を学ばせる。 ・講師のプロフィールを紹介し、講義の内容を予め理解しておく。
2.学習内容の検討	・事前学習の内容を知らせ、班ごとに調べたい内容を決める。 6項目—地理と自然、民族と言語、歴史と国際関係、政治と宗教、経済と産業、文化と芸術 上記の6項目に限らず、自分たちの調べたい内容を決めてもよいことを話しておく。
3.各班で分担 班長が集まり 決定	・各班で学習内容6項目を分担する。 ・班員全員が学習発表の2グループに別れ、それぞれで話し合いをさせる。
4.班員の作業分 担と作業手順	・図書室等も利用し、全員で協力し、準備する。 ・各班の調べた学習内容をまとめ、クラスで冊子を作成し、クラス全員に配布し、全体を理解しておく。また、発表の際、必要に資料等がある場合は、各班で準備する。クラスで作成した冊子は後日留学生にも渡す。

イ.当日（第5時限）

1.学習発表 2.質問の整理	・司会・進行等はH.R.運営委員を中心として行う。 ・各班が学習発表を行い、お互い学習内容の理解を深める。 ・各班が事前学習で疑問に思ったことをまとめておく。 第6時限の講師の後の質疑応答において、質問をする。
-------------------	--

\*\*各クラスの誘導の担当者は、留学生を応接室からクラスまで案内する。(14:10~14:15)

ウ.当日（第6時限）

1.講師紹介 2.講師自己紹介 (10分)	・司会・進行等はH.R.運営委員を中心として行う。 ・講師の自己紹介は2か国語（母国語・日本語）で行う。
3.講師の講義 (25分)	・講師の国について理解し、日本とのかかわりや外国からみた日本を理解する。 ・講師の生き方から生徒自身の在り方生き方を考える。
4.質疑応答 (15分)	・事前学習に基づき、多くの生徒が質問できるように時間的余裕を持つ。
5.まとめ	・講師の国と民族、文化等を正しく理解できたかを確認。 ・講師の生き方から自分を見つめ直す機会であることを話す。

エ.当日（放課後—15:30~16:10）

1.交流会	・各クラスのH.R.運営委員を中心として準備および進行を行う。 ・交流会は自由参加であるが、他のクラスの留学生との交流ができるので、できるだけ多くの生徒の参加があるとよい。 ・各国の留学生のパフォーマンスの紹介もある。
-------	---